

お茶うけ 第55話

りんごのなみ木

長野県飯田市の飯田東中学校の生徒たちは、飯田市を美しい町にしようと、1953年(昭和28年)に、広い道路の緑地帯にリンゴの木を植樹しました。雨の日も雪の日も木の世話をする生徒たちの姿に、当初は無関心であった町の人たちも協力的になりました。生徒たちは、待望の赤いリンゴが盗まれるという災難にもめげずに前進しました。

昭和30年代の初めに山本有三が書いた「リンゴのなみ木」は、この生徒たちが、さまざまな苦難を乗り越え、自分たちの理想の実現を目指して進む姿を描いたもので、新潮文庫の『心に太陽を持って』の中に収められています。

それから45年近く経った現在の「リンゴのなみ木」が知りたくなり、旅行のガイドブックを立ち読みすると、どの本にも飯田市の観光名所の一つと紹介されています。私は、「りんご並木」健在なり、と嬉しくなって、飯田東中学校に現状を問い合わせたところ、素敵な『夢と希望 りんご並木の記録』の小冊子が送られてきました。「リンゴのなみ木」の生い立ちの概要を紹介いたします。



昭和22年4月20日の大火で、飯田市は市の大半が焼け、焼失家屋3,577戸、罹災者17,800人の大きな被害を受けました。高田市長は、市を防災都市として再建するため、市の中央に30m幅の防火用の道路を作り、各地に緑地帯と貯水槽を設けました。

昭和27年、飯田東中学校の松島校長は、全国中学校長会に参加するため札幌市を訪れ、大通りに鬱蒼と繁る街路樹の美しさに感激しました。学校に帰った松島校長は、朝会で、街路樹の美しい札幌市の大通りと殺風景な飯田市の道路を比較して話し、さらに、ヨーロッパのある町にりんご並木があって市民みんなが大切にしており、落ちた実は気づいた人が拾って備え付けの籠に入れていると話しました。

この話を聞いた生徒たちは、自分たちが住む飯田市にも「リンゴのなみ木」を作ろうと学友会(生徒会)で話し合いました。なかには、リンゴの実がなっても盗まれてしまうという意見もありましたが、「リンゴのなみ木」を作る計画で最も大切なのは、生徒みんなが共同の精神を持つことと、それによってリンゴの実を盗むような人が一人もいないような飯田市にすること、明るい社会をつくることであると、全員の気持ちがまとまって、植樹計画が決議されました。

この決意を聞いて、松島校長も先生方も、生徒たちの夢と希望を育てようと協力しました。松島校長と学友会の代表は、何度も飯田市の助役に会って了解を取りつけ、商店街に協力を依頼しました。生徒たちの作業は、広い防火道路の中央の緑地帯の土を掘り返し、瓦礫を取り除き、リンゴの木が植えられるように整備することから始まりました。

昭和28年春に市から「リンゴのなみ木」事業の承認をうけ、秋に47本の苗木を植樹しましたが、7本が枯れて40本になりました。昭和29年はリンゴの木が若いので、実を摘果して来年に備えました。昭和30年待望の実が49個つきました。けれども、実が赤く色づいた頃、お祭りの晩などに心ない人に盗まれて、結局5個になってしまいました。さっそく学友会が開かれました。「リンゴを盗んだ人によって、ぼくらの目指す共同の精神も、明るい社会をつくる希望も踏みじられてしまった」と嘆く声もありました。しかし、「ぼくらは理想をかかげて立ち上がった。その理想がすぐに実現すると思うのは、甘い考えだ。何度もぎ取られても、どんな妨害があっても、この仕事は続けるべきであり、この骨の折れる仕事、根気のある仕事を続けることにこそ、ぼくらが立ち上がった精神がある」と意見がまとまり、理想を貫き通すことが満場一致で決議されました。

「日本の道百選」にも選ばれた「リンゴのなみ木」は、この先輩たちの意思を受け継いだ飯田東中学校の在校生たちが、リンゴの木をはぐくみ、年老いた木を若木に植え替えるなどして守ってきたものです。昭和46年には、その歴史を刻んだ「りんご並木の碑」が建てられました。碑文は、生徒たちや関係する人々の思いを込めて、「『りんご並木』が永く飯田東中学校を巣立つ学友の『夢と希望の指標』であれ」と結ばれています。

この話は、中学3年の道徳の指導書にも載りました。

以上

参考資料:

『心に太陽を持って』 山本 有三編著 新潮文庫

昭和56年 6月25日初版発行

『夢と希望 りんご並木の記録』(平成7年度改訂版) 飯田東中学校刊